徒弟アジズのお金の話

徒弟たちの収入

フィールドワークで通っていた仕立屋の店で、ある日偶然給料の帳簿を見た。親方が店で働く若者４人に払う、その月の給料を記したノートである。開いて記録をした後、閉じ忘れてしまったようだ。ノートは私の目の前に置かれていて特段秘密ということもなさそうだったが、私がこんなにも関心をもって中を見ているとは、親方は気が付かなかったかもしれない。できるだけさりげなく、ノートに書かれていることを凝視した。25,000CFAフラン（約5,000円）、30,000CFAフラン（約6,000円）…。この町に住んでまだ数カ月、はじめて見る誰かのお給料だった。相場はわからないものの、「この金額で食べていけるのかな」というのが、そのときに持った疑問だった。

私がフィールドワークをしているのは、ブルキナファソ第二の都市ボボジュラソである。この町では、服は注文仕立、つまり、客が仕立屋に布を持ち込んで、好きな形の服に仕立ててもらうのが一般的である。市内では、親方と徒弟数名という小さな店が数多く営業している。店で修行する徒弟は、親方の手伝いをしながら技術を身につけ、数年の修行期間を経て独立する。私が当時通っていたのは、市内で５本の指に入るとされる有名店であった。親方のＡさんは、仕立屋の店のほかに仕立技術の学校を運営し、またファッション・ショーを積極的におこなっている。洗練されたデザインと、しっかりした裁断・縫製にはファンが多い。当然仕立の料金も高く、他店の２倍、３倍は当たり前である。

店内では、親方が布を裁断し、若者たちが縫製する。４人の中では、仕立技術を一からＡさんのもとで学んだ、修行４年目の徒弟アジズが最古参である。アジズ以外の３人は、既に他店で技術を習得済みで、ここでは縫った服の点数に応じた歩合給で働いている。彼らはいずれも20代前半から30代前半の若者で、高級店の品質を支える優秀な働き手である。

暮らしとお金

アジズたちは、朝7時半から昼休み（12時から15時）を除いて20時頃まで、店内の作業場にいて親方から割り振られた仕事をする。縫製が主だが、布の裁断を任されることもあるし、仕立の学校で授業を受け持つこともある。親方がファッション・ショーをするとなれば、服の制作はもちろん、ショーのリハーサルや本番も手伝う。

彼らのその月の収入は、アジズは30,000CFA

フラン（約6,000円）、歩合給で働く3人はそれぞれ25,000～35,000CFAフラン（約5,000円～7,000円）であった。全員、翌月も同じ金額を受け取っていた。あとから本人たちに聞いたところによると、徒弟のアジズは仕事量にかかわらず、毎月同額をもらっている。アジズは見習いを始めた当初は月謝を払っていたが、技術を習得するに従い、月謝を払わなくてよくなった。修行3年目に入ってから月1万CFAフラン（約2,000円）をもらうようになり、その額が増えて今に至る。ちなみに、アジズの今の仕事量を他の若者と同様に歩合で計算すると、3万CFAフランはゆうに超えるそうである。親方が仕事の量を調節し、定額を払えばいいアジズに多く仕事を振っているのだ。歩合給の3人は、ズボンを1本縫ったら1,000CFAフラン（約200円）というように縫い賃をもらうが、以上のような理由で、だいたいいつも同じ額におさえられているのだという。

彼らの収入を知って以来、私はアジズたちの暮らしに注目するようになった。もらったお金で食べていけるのか知りたかったのである。アジズを例にとると、彼は母親、姉、弟と4人で暮らしている。借家住まいで、家賃5,000CFAフラン（約1,000円）はアジズが払っている。アジズはこのほかに、家族の食費として毎日500CFAフラン（月額にして約15,000CFAフラン（約3,000円））を母に渡しているほか、弟の学費、家の電気代を払っている。店で働く日（月～土）には、昼食代として毎日200CFA（約40円）、ひと月ではおよそ5,000CFAフラン（約1,000円）を使っている。金額がわかっている支出だけで月額約25,000CFAフラン（約5,000円）となり、収入の大部分が消えることになる。

アジズは修行中の身とはいえ、稼ぎの中から家計にお金を入れており、出費を計算すると日々食べるので精一杯ということになる。日々の娯楽や通勤のためいつか買いたいと話すバイクなど、とても手が届かないだろう。他の若者たちも、一人暮らし、あるいは家族と同居など状況は異なるが、家賃や電気・水道代、家族の食費など、やはりそれぞれ出費があるようだ。

とはいっても、アジズたちに悲愴感はなかった。また実際に、生活を楽しんでいる様子も伝わってきた。昼食以外に朝食やおやつを買って食べることもあるし、携帯電話を流行の機種に買い替えたり、DVDプレイヤーを買ったり、ある日には、自作のシャツに文字を染めつけ、踊りに行くときに着ると張り切っていたこともあった。それなりにほしいものを手に入れているようだ。

個人の仕事

彼らが個人でも注文を受けていると知ったの

は、それからしばらくたってからのことだった。親方からもらう以外に、自分で稼ぐ収入があるのである。この個人の仕事は、仕事後や休日に独自に仕立の注文を受けるもので、作業は自宅などでおこなわれていた。親方には隠れておこなっているようだ。アジズたちは、この個人の仕事を仏語でオクラを意味する「ゴンボ」と呼んでいた。現地のスラングで「お金」という意味らしい。

ある日曜にアジズの家を訪ねると、アジズと同僚の一人が客間で服の縫製やアイロンがけに忙しそうだった（写真①）。訪ねたのは午後だったが、アジズはその日は朝５時から働いているという。客間には大きな木製のアイロン台と、炭を使うアイロン、足踏みミシン一台、そして同僚が持ち込んだ電動ミシンが一台おいてあった。さながら仕立屋の店内である。

注文してくれるのは、近所の人や、市内で知り合った人などである。日々の暮らしの中で、アジズを仕立屋と知った人の中から注文する人が現れる。アジズがつい最近スーツを納品した若い女性は、平日は銀行員、週末は近所の商店で店番をしている人だという。アジズがその商店に寄ったときに、顔見知りになっていたその女性から、「仕立屋なんでしょ？」と声をかけられた。まずは１着頼んでみると言われ、服を作ったところ気に入られて、その後彼女はさらに３着注文してくれたという。アジズは毎日自分で仕立てた服を身に着けているが、このおかげで自分が仕立屋であることを多くの人に知ってもらえるそうだ。また、有名店で働いているということも、注文を受ける上で有利に働くという。Ａさんのところで働いているなら、腕もいいだろうと思ってもらえるのである。

アジズたちの話に興味を持った私は、当時コンタクトを取っていた仕立屋協会のメンバーにも

写真①自宅での作業（縫製）中の様子

話を聞いてみることにした。ボボジュラソで働く仕立屋なら誰でも加入できる協会で、当時メンバーは60人ほどだった。このうち30人から、修行時代の話を聞くことができた。彼らは、短くて3年、長ければ10年と、人によってはかなり長期にわたって仕立の修行をした。ほとんどの人が、見習い期間中は保護者と暮らしながら、親方から昼食（代）や小遣いをもらっていたそうだ。小遣いは、衣服を洗うための石鹸代という名目で語られることが多かった。見習い期間中に親方から支給されるのはあくまで食事の補助、生活の支援ということのようだ。そのほかは親方の稼ぎや徒弟の店への貢献度により、稼ぎから分け前を与えられることもある。技術が上がるに従い、週末にもらっていた数百CFAフラン（数十円）が、数千CFA フラン（数百円）に上がったと話してくれた人もいた。彼らの話を考慮すると、アジズの待遇は必ずしも悪くない、むしろいい方なのかもしれない。

話を聞いたうち半数の人が、徒弟時代に個人でも仕事をし、何らかの収入を得ていたそうだ。アジズたちは個人の仕事を「ゴンボ」と呼んでいたが、「ビジネス」、「ディル（英語の deal）」などという呼び名もきいた。やはり、個人の仕事は親方には内緒だったという人が多かった。

個人の仕事をしなかった人にも話を聞くと、自分のところにきた注文も親方に取り次いだという人がいた。親方のもとで技術を教わっていながら、自分個人で仕事を受注するのは親方に対する裏切りだという人もいた。確かに、個人の仕事をしていた人の中には、親方の不在中に来店した客と交渉し、個人の仕事を受けたという人もおり、これでは裏切りといわれても無理はない。親方の店に夜中に忍び込み自分個人の仕事をしていて、それが親方の知るところとなってしまい、店を追い出されたという人もいた。

当時の徒弟たちが、親方に見つからないように個人の仕事をしていた話は、聞いていてスリリングであり、とても興味深かった。けれど、それ以上に印象的だったのは、個人の仕事をすることによって、徒弟たちが独立に向けて力を蓄えているということである。個人の仕事を継続することで、独立に必要な資金を貯める、あるいは自分の固定客を獲得することができるのである。ある親方は、徒弟時代を振り返り、個人で受けた注文が増え、自宅が注文の服でいっぱいになったとき、独立を決意したと語った。

アジズも、まさに自分の技を磨きながら将来の独立に備える一人である。アジズには年の離れた兄がいて、その兄に見習いを始めた当初ミシンを買ってもらった。そのミシンを使って、見習いを始めて1年たたないうちから個人の注文を受け始めた。当時は、近所の人や友人から注文を受けても、技術が伴わず、同じ人が再び注文して

くれることはなかったそうだ。その後、技術が上がるに従い、同じ人から繰り返し注文を受けるようになった。また、彼の仕事に満足した客が他の客を紹介してくれるようになってきたという。

アジズには、修行6年目に5カ月間、個人の仕事の受注状況を記録してもらった。この期間中、アジズは月に25,000CFAフラン（約5000円）～100,000CFAフラン（約2万円）、平均して月約5万CFAフラン（約1万円）の収入があった。つまり、個人の仕事で、親方からもらう金額の1.5倍以上を稼いでいた。収入が最も少なかったのは、体調を崩し同僚に仕事を譲った月であり、最も多かったのは、クリスマスやイスラーム犠牲祭、大晦日などのために多くの人が服を仕立てた12月だった。人々が畑を耕しに農村に行ってしまい、仕立屋が暇を持て余すといわれる8月にも、約50,000CFAフラン（約1万円）の収入があった。アジズは、個人の仕事の収入で家族と自分の生活費をまかない、親方からもらうお金は貯金している。DVDプレイヤーも、その貯金で買ったものだ。

力を蓄え独立へ

Aさんの店では、アジズが見習い6年目に入る前に、歩合で働く3人の同僚たちが、よりよい条件を求めて店を去っていた。Aさんが固定給のアジズに多く仕事を振り、その他の若者の仕事量を調整しているらしいことはすでに述べたが、歩合給の3人は、働きたいのに仕事をもらえないと不満を募らせていたらしい。

残されたアジズは、仲間が羽ばたく様子をみて心が動かないわけではなかったが、修行6年目になっても、月30,000CFAフランでAさんのもとにとどまっていた。6年間は親方のもとで頑張ろうと思っていたようだ。Aさんは自分の修行時代について、「3年間で技術を教えてもらい、次の3年間は親方のために働いた」、と話していた。他の3人とは異なりAさんから技術を教わったアジズは、Aさんへの義理を果たしたかったのだろう。

修行を始めて丸6年が経つ頃、アジズは保護者である兄を通じてAさんと話をし、その年の年末に店を出ることを了承してもらった。アジズに残ってほしかったAさんが、その後も様々な理由をつけてアジズを引き留めたので時間はかかったが、予定から半年経った翌年6月、アジズは店を出ることを許された。

晴れて店を出たアジズは、まず首都ワガドゥグに行き、知り合いの親方のもとでスーツの仕立技術に磨きをかけた。その後ボボジュラソに戻って自分の店のための物件を探し、店を出てから1年半後、市内の交通量の多い道路沿いに、自分の店を開いた（写真②）。

アジズは親方Ａさんのもとで技術や知識を学ぶほかに、自宅で個人の仕事をし、自分の客とのやり取りの中でも仕立屋としての力をつけてきた。アジズには、既に「服はすべてアジズに頼んでいる」というお客さんがいるそうだ。アジズの店の開店当時日本にいた私は、開店やそこに至る経緯を現地で見届けることはできなかったが、アジズなら大丈夫だろうという思いで、この朗報を受け止めた。

遠藤聡子

写真②アジズの開いた店の外観